

## 飛翔な日々 〈飛翔編集員のつぶやき〉

### 「私のバイトライフ」(26生 岡田菜緒)

私がバイトを始めて早五か月になる。

一か月目でバイトへの憧れと理想が消え現実を知り、二か月目でミスを大量発生させ店長からの電話を恐れる日々を経験し、

三か月目で仕事に慣れてきて態度の悪いお客様や電話対応が悪いお客様の対応の仕方を覚え、

四か月目で少しずつ仲良くなってきたパートのおばちゃんと思痴をこぼしながら仕事をし、

五か月目で働いている自分すごいなあとうぬぼれつつもバイトを辞めたいニートに戻りたいという矛盾を抱えながら店長に「バイトを辞めることを考えているのですが…」といったら店長を切れさせ、

そして迎える記念すべき半年目で留学のため一時バイトをお休みし、これを機会にニートに戻れるのかなと期待していたところでの店長のこの一言。

「留学から帰ってきたらまたよろしく↑いまこ。」

お金を稼ぐことの大変さと仕事への責任感を感じつつ、春からの私のバイトライフが幕を上げる…。

### 「無趣味な人へ」プロ野球編(26生 柴山真一)

無趣味な若者が多いと聞く。

以下は私の浅薄な人間関係の中での勝手な思い込みだけでも、総科の学生にもそういう人は多いのではないか。平日はレポートやアルバイトに忙殺され、せつかくの休みもSNSなんかをしているうちに無為に空費してしまい、ああ俺の生きがいつて何なんだろうなんて言っただけで一日が終わる。生きがいという言葉も聞きかたかもしれないが、趣味というのは要するに自由な時間の中でいかに自らを楽しませるかということだと思ふ。あくまで己一人で、独善的に求め究めていくところに面白味があるのであって、そこには多くの思考と判断が伴わなくてはならない。換言すれば、これは非常に創造的な営みである。無趣味なこと創造力の欠如とすれば、それは現代において既成の枠組みのなかで何者かに掌握される生き方を余儀なくされることを意味するのであって云々。前置きが長くなったが、読者諸賢のなかにもそういった悩みを抱える方もあろうかと思つて何か参考に趣味としての実例を挙げたい。

私の趣味と言えそうなものの中で、ここに書いても比較的差し障りがないように思われるプロ野球についても書いておこうか。ともかく、ファン球団というのは各々持つことだろう。無ければ横浜を。毎日、スポーツニュースでその日のファン球団の試合結果を確認する。勝っていたらぬか喜びする。負けたら一通り悔しがったあとポジ要素を探して寝る。これだけでも単調な生活に彩りがもたらされるのである。もちろん時間があればテレビやインターネットで中継を見る。そこに繰り広げられるプライドをかけた真剣勝負の熱さ、一球毎に何が起るか分からない緊迫感、それゆえにチャンスやピンチの場面では思わず息を詰めて祈らざるを得ない。名手たちが見せる併殺完成やホームラン

の描く軌道の美しさにも魅了されることだろう。そうしていくと自然と肩入れする選手が出てくる。野球が他のスポーツと決定的に異なっているのは、打率や防御率など個人の成績が数字としてはつきり出てくるところだ。これを見て我々はその選手がどのように、どれだけ活躍しているかを判断し議論できる。チームプレイでありながら個人のキャラクターが重要視されるこの二面性が非常に面白いところで、最良の選手の成績を追ったり、最良の打順の組み合わせ等議論したりするとますます飽きることがない。あとは応援歌を覚えるとか、球場に行つて観戦してくるとか、白ノリ黒ノリ・男村田・横浜を出る喜びといったプロ野球ネタを解すとかするともうプロ野球を趣味と公言して憚らないレベルといえるのではないか。

### 「独りよがりの子の嘘」(26生 竹内音寧)

先日とあるカフェのカウンター席から窓の外を見てみると、ピンクのリボンがついた小包を持っている女の子を見つけた。眉間にしわを寄せてきよろきよろしていたので、ちよつと不思議な子だと思ひ興味を抱いた私は、その子を観察することに決めた。

遅めのバレンタインだろうかと乙女のような妄想を駆け巡らせていると、彼女のもとへ宅配サービスのお兄さんがやってきた。お兄さんは、どうやら彼女に長方形の箱を渡しに来たようである。対して彼女は、小包を持つてはいるものの背中に手を回してそれを隠していた。渡さないのだろうか：彼女には申し訳ないが、このもどかしさが正直たまらない。

私の陰からの応援も甲斐なく、彼女はお兄さんに深々お礼をしただけで、結局

小包は渡されなかった。小包を眺めて溜息をついている様子を見るに、やはりそのお兄さんに渡したかったようである。

そんな健気な彼女にある変化が見受けられた。観察初めにあつた眉間のしわがなくなつていたので。というのも、彼女が受け取つたのはメガネとそのケースだつたようで、視界が戻つたからか彼女の表情は明るくなつていたので。

笑顔でその場を離れていく彼女を眺めつつ現実逃避をしていた私だが、その時この物語を伝える相手が隣になかつたもので、突然自分が独りであることに気づかされた。一人でカフェに行くことが趣味なのだが、大体最後は現実に引き戻される。

まさか飛翔の日々でこのストーリーを語ることになるとは…と思ひながら無表情で文字を打ち込んでいるわけだが、まあこんな日も悪くない。

### 「日常」(26生 尾関寛之)

私たちの世界には日々いろいろなことが起こり多くの人たちの感情であふれている。

皆さんはご存じだろうか。「世界五分前仮説」という言葉を。それは、私たちの世界は実は五分前に始まつたのかもしれないという仮説です。これを確かめるのは不可能であるのもしかしたら本当のことかもしれない。そう考えたら面白いし、私たちが一生懸命生きているこの世界は非常にほかないものだと思います。でも、結局は今を一生懸命生きようというありふれた言葉にいきつくのです。そんなこんなであつたという間に二セメも終わりもう少しちゃんとしておけばよかつたと思う自分とやりきつた気持ちであふれている自分の二人が存在して

いて、もどかしい気持ちであふれています。春休みには何か新しいことにチャレンジしたいと思っっているのですがあと一歩踏み出せずに、結局は何もせずこのまま春休みが終わってしまいそうです。まあ、このような自分の失敗談をつらつらと書くのもどうかと思うので二つほど最近の出来事で自分の心に響いたことを書いて締めくりたいと思います。

まず一つ目は、先日自分のバイト先の某古本屋に外国人のお客さんがいらして英語でケータイの使い方がわからないので教えてほしいと言われたのですが、自分はまだ英語がしゃべれないので先輩にすぐに任せてしまいました。この時に英語がペラペラしゃべればかっこいいと思いました。ということと少しづつ英語の勉強をしていきたいなと感じた日でした。

二つ目は、後藤健二さんについての記事を最近見たのですが、そこに書いてあったのが、

「後藤健二さんって知ってる？」

「あー殺されちゃった人でしょ？」

ではなくて、

「命がけで世界の紛争地域の状況を日本に伝えて捕まった日本人も助けようとした人だよな？すげーよな。」

ってなってる。

と書かれていてかなり心に響きました。

## 「歩くこと」 (26生 宮里洋志)

最近よく散歩をする。散歩とはいっても、学校とかバイト先から自転車があるのに歩いて帰ったりとか、少し離れたコンビニまで歩いて行ったりとか、そのくらいのことだ。いつも決まっちゃってちよっと寂しげな音楽を聴きながら、普通の人も少し早いくらいのペースで歩く。

でも、いつもはバスとか、自転車で通過する道も、その3分の1から10分の1くらいしかないスピードで通ると今まで見えなかったものが見えてくる気がする。正直なところ、まだそんなものは見つけたことがないけど、いつか誰も気がつかないようなものが見つけられるのではないかと期待している。

考えてもみれば、世の中は本当に便利で、人間が楽に生活できるようになった。そのせいで一体どれだけの人が「歩くこと」をしなくなったのだろうか。家から100mもないところまで自動車で行ったり、止むを得ず歩くことになるように「疲れた」とこぼす。便利さを享受しているのは自分も同じなのだけれど、人類が進化の過程でせっかく手に入れた「二足歩行」歩くこと」をもっと試みてはどうだろうか。

レポートに行き詰まったり、嬉しいことがあったり、逆に悲しいことがあったり、何も面白くないときでも、もしかしたらふらっと歩いている間に、レポートの画期的なアイデアが浮かんだり、嬉しいことがより嬉しくなる出来事が起こったり、悲しみを忘れられたり、何か面白い発見があるかもしれない。自分はそんな思いを「歩くこと」に寄せている。